

# 家族の構造と転換（その3）

## －未来の人類家族とは？－

浅野慎一『人間的自然と社会環境—人間発達の学をめざして』「第4章 【人間の確定論】と【人間の揺らぎ論】」「第7章 血縁・生殖・世代・家族」大学教育出版 2005年

家族＝「生命・生活」の再生産の基礎単位。∴ 近代の市場原理・個人主義を克服する社会的基盤。

家族の愛情原理・次世代の生育：市場原理・産業で代替し得ず。

家族（夫婦・子供）の創出≠市場価値の完璧な測定。

親と子は互いに選択不可能。∴ 取り替え不可能、「かけがえ」のなさ。

誕生：自己決定不能。「みんな泣きながらこの世にやってきた」（シェイクスピア）。

個人主義者：両親がいなければ、生まれて個人主義を主張できない。

両親から与えられた遺伝子的組成、出身家庭の経済的・文化的環境に制約・規定。

ホモサピエンスとしての遺伝子からの「自由」も困難。

家族（特に親子）：近代個人主義・個人の尊厳・自己決定と抵触・矛盾。

一組の男女が生殖＝精子と卵子の結合、二人の遺伝子が混合した子供の誕生。（人類誕生時～）

無性生物→有性生物に進化（広義の夫婦・親子関係の誕生）。

有性生殖：生物種を爆発的に進化・多様性。人類・ホモサピエンスも生成。

有性生殖・遺伝子伝達：人類発生以前～、人類発生の基盤。

∴ 人類：生殖・遺伝の単位である家族から離脱不可能。

近代市場経済・資本主義・個人主義による生殖・遺伝（家族）の包摂は不可能。

市場経済・個人の尊厳等、近代的慣習：生物種としての人類にとって克服すべき制約・限界。

BUT 近代資本主義下：家族が市場原理・個人主義によって侵食。衰退・弱体化。行く手は？

### I. 男女・夫婦—「愛」の選択と提供

近代社会：恋愛結婚の増加。

日本：高度経済成長期以降（1955年～）、日本型企业社会（終身雇用等）：職場結婚。

結婚産業の活性化。恋愛結婚を祝福・演出・不安解消。

高度経済成長の終焉・日本型企业社会の崩壊（1980年～）

→結婚紹介業の活性化。インターネット：多数の候補者の詳細な情報を提供。

近代社会：結婚相手の暗黙の選択基準：労働市場における相手の価値（職業・収入・学歴等）。

日常生活での社会関係（出会いの場）：階級・階層的に分断。

高度経済成長・日本型企业社会・職場結婚：「自然」・無意識に価値評価。

低成長時代・結婚紹介業：多様な情報（候補者）から意識的に評価・選択＝第1次的スクリーニング。

その後、実際に会って、より深く知り合い、恋愛へ。

近未来：AIの活用。数億人の膨大な個人情報ビッグデータ分析、

双方にとって「最適の理想の相手」を選定・提示。予定調和。

a) AI＝「理想の相手」を選択するための手段・ツール。人間の理性の貫徹。

個人の選択の幅を広げ、個人の尊厳を尊重。人間的。

b) AIによる人間の支配。人類・個人の尊厳・自己決定権の否定。非人間的。

### II. 子供の誕生と「製造」

近代的な市場経済：子供の質の選択、親による自己決定。

①出生前診断・着床前診断、中絶。

技術水準の向上＝中絶の範囲の拡張。

②精子バンク・卵子提供ビジネス。（「代理母」）。

精子・卵子の多様な価格。

批判・否定の困難さ

1) 出生後の子供への教育環境・生育環境の選択＝「親の愛」？

→出生前の子供への遺伝的環境の選択＝「親の愛」。

2) 出生者の人権厳守。差別は不当。

3) 優生思想（障害者・弱者の排除）・国家の強制？

NO! 民主主義、親の自己決定、自己選択。

福祉国家の制度・理念（「生活の質（QOL）」）と整合的。

4) 肯定派：優秀な遺伝子を次世代に継承＝人類全体の利益。

③クローニング。

体細胞の細胞核から同じ遺伝子組成をもつ一つの生命・生物個体を生成。（精子・卵子の受精不要）

個人主義的な次世代製造法。BUT 「世代」の揺らぎ。親子？ 双子の兄弟？

個人主義からの批判・否定は困難。（技術的安全性の問題を除けば）

1) クローン人間の人権厳守。差別は不当。「一万子」「十萬子」でも同じ。

2) 「クローン人間として生まれたくはなかったはず」？

NO! 誰も親・生まれ方を選べない。

3) 同じ遺伝子的組成も不当ではない。（一卵性双子、生育環境による多様な人格形成）

BUT 生物種としての人類の利益：様々な危険・リスク。

人類の同質化・「進化の拒否」の側面。遺伝子的多様性の減少。環境変化への耐性脆弱化。

ヒト・クローン製造の自由を禁止する「人類全体主義」？

vs 個人の自由・自己決定を優先するヒト・クローンの製造？

④人類の同質化・「進化の拒否」：近代的市場原理・テクノロジーで解決可能。

多人数の細胞核を混合させたハイブリッド・クローン。

遺伝子デザイン・「理想の遺伝子配列」をもつ「パーフェクト・ベビー」の設計。

人類以外の遺伝子の活用、非生物的新素材の活用。高度なスペックの獲得。

ポスト・ホモサピエンスへの進化。

家族（親子関係）の多様化・複雑化・揺らぎ。

a) 人類：一つの生物種。さらなる進化（または滅亡）は必然。

人類が生み出した科学技術を駆使し、ポスト・ホモサピエンスへの進化促進＝理性的・人間的。

b) 人類の否定＝非理性的・非人間的。絶対に許すべきではない。

近代的市場原理・個人主義・テクノロジーの進展：a)の方向性？

### III. 産業・生産力・社会構造変動の従属変数としての家族

人間の家族・愛情原理：技術、産業・社会的生産力の発展により変化。

植物・魚類・昆虫等：「家族」を作らない。

鳥類・哺乳類等：「家族」は一時的、形態不変（＝生物的本能）。

人間：a) 「家族」を長期にわたって維持。

（長期間の子供の養育、脳の進化→互酬性・個体識別、文化的紐帯等、複雑な感情。

自ら創出する技術・産業・社会的生産力の習得が必要。長期的な共同・連帯の必要）。

b) 「家族」の形態・質が短期間に変化。（＝技術・産業・社会的な生産力の発展に左右）。

家族（生殖・養育）と感情・愛情：産業の社会的生産力、社会全体の構造変動の従属変数。

ex) 繁殖（妊娠・出産）のみを目的としない独特の性生活・性文化。

近代社会における「子供の発見」。（「小さな大人」→「保護すべき子供」）

近代家族の子育て：「条件付きの愛」（ディザート&ガドリン）

「良い子」の評価：（前近代）親による家族の「内部評価」

→（近代）近代的知識をもつ専門家による「外部評価」。

親は「外部専門家のエージェント」に。

現代の家族・子育て：国民国家・市場原理を前提とした“生き残り”や成功が目標に。

家族の形態：母系性→父系性・一夫多妻性・一夫一婦制。

見合い結婚→恋愛結婚→IT・AIによる変化。

大規模な複合家族→核家族・単身世帯、非婚化・少子化。

& どの時代の人も、自分の生きている時代の家族・愛情を自明視。（不変・生物的本能と誤解）。

∴ 親子・夫婦への「甘え」→容易に「家族崩壊」のリスク。

市場経済を前提とした近代社会・近代個人主義からの離脱（ポスト・モダン）が先か？

or 市場・テクノロジー・個人主義を維持した人類からの離脱（ポスト・サピエンス）が先か？。